

沖

3
2018

俳句雑誌【お題】



眉雪

能村 研三

西と東

楯くべて刻遡る 炉酒かな

トラックに楽器が積まれクリスマス

大年の氣息に敵ふ歩幅かな

セーターを纏ひ静電気に覚めぬ

勢ひ字の一字が滲む試筆かな

七福神終ひ詣は川に出て

割ることに拘りてをり鏡餅

寒の水野性いささか取り戻す

成木責眉雪の口伝聞き入りぬ

骨正月品格緩き書肆にをり

この冬、所用で関西に二度ほど行くことがあった。東海道新幹線で旅をすると必ず関ヶ原を通ることになる。ここは戦国時代天下分け目の戦いでも知られるが、北は伊吹山、南は鈴鹿山地に挟まれ、中山道、北国街道、伊勢街道の分岐点にもあたる地勢的要所でもある。日本海側の寒気の通り道であるため、大雪が降り交通の難所でもある。幸い私は今回の二度の旅では列車の運行には支障がなかった。

昨年の勉強会で岐阜に行った帰りに有志で関ヶ原を訪ねたので、車窓からの景色も親しみがあり、この地の戦いの勝敗によって今の首都としての東京と第二の都市としての大阪の位置関係を改めて認識させられた。

東西の文化や習慣も違いがあり、例えば、お雑煮の餅でも西の「丸餅」東の「角餅」の違い、味も関西では薄味、関東では濃い味、駅のエスカ

レーターに乗っても関西では「右立ち」関東では「左立ち」で反対側を急いでいる人のために空けるのが慣行である。

関ヶ原の天下分け目の戦いで西軍が勝利していたら、日本の首都は大阪にあつて東京は単なる地方都市のひとつであつたかも知れない。

俳人の氣質も関東と関西では若干の違いがあるようだ。俳人協会の関西地区の「新年の集い」に参加させていただいたが、二五〇名近くの人が来られ、熱氣溢れる会となり新年早々関西の方々の結束力に圧倒された。

関西では、俳句の三つの協会が連携して行う行事が多くあり、こんなところにも、関西の人たちの乗りの良さとフレンドリーな氣質をうかがうことが出来る。

近年「沖」では関西での大会が行われることが無くなったが、今年は久しぶりに関西地区で勉強会を開催しようと計画をしている。

能村 研三

天邪鬼

森岡 正作

新玉の月に研がるる志
 母いつも蜜柑を花のやうに剥き
 賑はひの外にありけり寝正月
 鷹の目となり鷹匠の放ちけり
 如何したと鯉の浮きくる落葉焚
 突つ突いて海鼠にもある核融合
 着ぶくれの身に飼ひ慣らす天邪鬼

今年の冬は寒い。雪国生まれで寒さには強いつもりでいたが、毎日寒くて、どうしてこの一年でこんなに体力が落ちたのだろうと心もとなく思っていた。しかしそのうち、周囲の人達が口々に今年の冬の寒さを言うのを聞き、少し安堵したのである。そうしたなかで、ふとへくちびるを出て朝寒のこゑとなる。という登四郎先生の句が口を衝いて出た。朝起きて今日は寒いなと思いつつ、台所に居てお弁当を作っている奥様に、「寒いね」とでも声をかけたのであろうか。先生の第一句集『咀嚼音』の一番最初に載っている句である。昭和二十三年の作で、七十年も前でありながら今詠まれたようにも感じられる。俳句の命ともいえるべき言葉の輝きが少しも失われていないのである。名句を口遊ぶのは楽しい。

森岡 正作

蒼茫集

返り花

梅村すみを

模糊と

千田百里

ものの色夕べは淡し返り花
 *水鳥に浮くてふしづけさありにけり
 下手な字に人柄見ゆるのつべ汁
 こがらしの笛吹き上手唄上手
 車椅子同士ぶつかり冬あたたか
 凍蝶の触るれば微塵となりぬべし

船上に模糊と年越す緯度を越す
 *北斎の波濤に乗りし夢はじめ
 日照雨ともはたしぐれとも奥嵯峨は
 箸使ひ論されし日や根深汁
 女子会の資生堂パーラーしぐれ
 待春の縄もて大波小波かな

冬 日

安居正浩

竹林

大畑善昭

初星の見えぬ見えないほどが良し
 綿虫や名曲喫茶残る古都
 管理人さん經由で届く歳暮かな
 *もつたいなや酢牡蠣が喉をすべりゆく
 雪女さびしき後姿かな
 妻の背にほのかな冬日介護され

鶏旦の空障りなくあるばかり
 元日の竹林に日の回りをり
 いつも来る猫に御慶を申すなり
 産声は男の子と思ひ冬木に日
 大寒の青空へ発つエレベーター
 *江戸川は青春の川冬たんぽぽ

賢者の石

辻美奈子

柚子湯より覗く若さの膝小僧
朝までの余白をうづめ羽布団
垂直に凍る手拭朝稽古
雲一つなくて天皇誕生日
*冬うらら賢者の石のやうに亀
いづくより寒夕焼の裂け始む

時空

吉田政江

鷹匠の本番を待つ手繰紐
*言はでものこと口を出で石路の花
煤逃げのさらりと持論翻す
湯に浮かぶ柚子に小さき爪の跡
ぬき足の形に乾き枯蓮田
冬眠やどこか時空を忘じをり

うすうすと

柴崎英子

鯰大根とろりと時のゆるびけり
蓮枯れて幽かに水の昏さかな
*喪にこもる日のうすうすと白障子
遺されて生くる月日の蒲団干す
振り向いてふつと一人や冬珊瑚
寒の水飲んで弱気の虫封ず

悪亡ぶ

宮内とし子

楯明り一話も二話も悪亡ぶ
*吼ゆるとも突くとも鯨反り身見せ
戦さ場のありしあたりや山に雪
臭だけ残る糶あと冬かもめ
北斎の波よりあれは宝船
常のこと出来るしあはせ雑煮椀

手紙

大川ゆかり

止みさうな雨柵の花匂ふ
校門に校長先生霜柱
*クレヨンで書かれし手紙クリスマス
冬あたたか駅舎に馴染む木のベンチ
白障子ほつそり止まる猫の影
残鐘のさざ波のごと去年今年

持ち物検査

楠原幹子

さはらせてもらひて鷹の羽ぬくし
思ひ出は濾過され冬の薔薇真紅
*狐火や気がつけばバス乗りすぎし
*達磨ストーブむかし持ち物検査あり
寒牡丹完璧といふ孤高かな
ゆづられし席は素直に初電車

光芒

細川洋子

父を想へば光芒の枯ポプラ
南部雪吊ひかりの筋の降り止まず
しろたへの千枚漬をひとひらづつ
大年や母港に帰る心地せり
*ふかふかに賢くなりし干布団
毛細血管十万キ口とふ星新し

二陣来て

林昭太郎

*幾万の冬芽のちから空支ふ
冬うらら象舎に鳩の降りぬたり
ドアノブに指の吸ひつく寒さかな
二陣来て白鳥の湖うごきだす
蒲団干す青き地球の一隅に
大寒の卵ぐらりと茹であがる

潮鳴集



地の息

菊地光子

* 地の息のひかりとなりぬ福寿草
クリスマスサザエさんは平家建
身綺麗に生きてゆきたし冬薔薇
豆腐屋の喇叭は二音風邪心地
待春やすり寄るやうに鯉の口

伊能 図

大沢美智子

青天のまま夜となりぬ降誕祭
探鳥の筆談ノート冬あたたか
* 伊能図の山河顕ちたる淑気かな
いつの間に二重瞼やお年玉
琉金の鱭すきとほる夜の雪

明きのかた

富川明子

* 青鷹翔くる全天明きのかた
狐火を語り古老と言はれけり
耳遠くふるさと遠く懐手
女正月ちひさな嘘も持ちよりて
旅立ちの子あり連風きらきらす

土の筋力

森村江風

* 若水や青の勢ふ水の星
天動説まさしく信ず初日の出
起き抜けの土の筋力霜柱
牛鍋やぐつりぐつりと宵膨る
盛り塩の誘ふ白さや日脚伸ぶ

南部訛

諸岡和子

牧小春レースの仔豚逆走す
枯木山統ぶ鉄塔の仁王立ち
初心へと帰る道あり龍の玉
* スコップの肩の突つ張り寒波来る
南部訛 醜に聞かせ寒造

時 差

本池美佐子

紅葉づりて赤より緋し満天星は
風花す列島に時差生まれけり
山肌を禪のごとく雪の道
* 遠吠えや雪なほ残る吹き溜り
千万間ヶ原の雄叫び抱いて山眠る

宝 船

兵藤 恵

ポケットを叩いて探る革手套
言葉みな白息にして告げらるる
* 霜柱一足ごとの咀嚼音
宝船尻ポケットに差してあり
待春の屋根に大きな音一つ

地下電車

佐々木よし子

* 波音にまさる風音水仙花
初日浴ぶ地上に出でし地下電車
初富士を遠見に喜寿のころざし
干菜吊る富士の風音水の音
鉄塔のふんばつてゐる大枯野

カリヨン

七田文子

* 冬北斗山湖の水を掬ふかに
触れ合はばカリヨンの音冬の星
荒星を宝石箱に加へんか
太平洋の波音足下冬菜畑
守衛室の紅一点やシクラメン

鷹ひとつ

内山花葉

余呉荒るる日の大空や鷹ひとつ
茶の花の白き矜持を吾も欲し
* 長良川小春どこか似てゐる鶴と鶴匠
老練の鶴へ降るほどの冬の星
ワイン蔵の丸窓明りクリスマス

飛鷹選評



能村 研三

初明り東京は脈打つてゐる 鈴木 光影

元日の日の出前に見られるほのかな光、その光はだんだんと空を朝の色にしていく。初日の出は、太陽が顔を出したときにクライマックスとなる。初明りは、その前のほのかな明かりでまだ、蒼暗い闇の中に沈んでいる、元旦の空。やがて、東の空に明るさが動くようになるといよいよ新年の夜明けが始まる。先師登四郎は七四歳のとき「初あかりそのまま命あかりかな」と詠んだが、現在「沖」の投句者で一番若い三十歳の鈴木光影さんが詠むとこんな句になる。光影さんにとって東京は仕事や日常生活の要になる所であるが、眠らぬ都市東京も初明りと共に早くも脈を打ち始めた。東京という大舞台での大きなはばたきを期待したい。

命あまさず生きよと波郷冬木竹つ 栗坪 和子

石田波郷の忌日は十一月二十一日。へ七夕竹借命の文字隠れなし胸を患った石田波郷はある年の七夕を療養所で迎えた。患者たちがこしらえた七夕飾りのなかに、その文字をみつけた。

借命という言葉は波郷の造語と思われるが、命を惜しむという波郷の言葉を作者は咀嚼して「命あまさず生きよ」という絶唱となった。葉を全て落した冬木が冬の風にさらされながらすつくと佇っていた。

泥濘に踵跳ね上げ根木打つ 大久保志遠

根木打ちとは子どもたちの遊びの一つで、先をとがらせた木の棒が根木で、これをやわらかい土に打ち込み、次の者が自分の根木を打ち込みながら、前の者の根木に打ち当てて倒してそれを分捕るのである。作者が幼少の頃の思い出が克明に蘇ってきて細かい描写の句となった。

〇番線ホームの先の枯野かな 稗田 寿明

昔千葉駅に〇番線ホームがあったように記憶しているが、今でもあるのは千葉県内には四街道駅、佐原駅、成東駅に〇番線があるそうだ。いずれにせよ乗降客の多い都会の駅には〇番線なるものは無い。上下線が行交うホームの他に何らかの目的で作られたホームで、そこから先が枯野に繋がっていると旅情を掻き立てられる。

年惜しむあれそれこれと忙しきも 棚橋 朗

年齢を重ねると「あれ」「それ」「これ」と、主語が無い会話を頻繁に使う人がいる。自分の中でストーリーが出来ていて、相手も知っていると思つて話しかけてくるのだが、本人以外には主語が一向に理解できない。まして、普通でも忙しい年の瀬であれば「あれ」「それ」「これ」の指示代名詞を多用することが多くなるようだ。

〈以下略〉

沖作品



終はりあることの嬉しき十二月 東京 鈴木 光影

* 初明り東京は脈打つてゐる
去年今年少しづつ減る靴の底
飼猫に三日の欠伸見られたる
元朝や鳥人獣おとを消し

市川市 栗坪 和子

* 命あまさず生きよと波郷冬木竹つ
黒潮は海の街道鯨来る
売られゆく牛を梳きやる夜寒かな
猫這入り今年の火燵ととのひぬ
稿を待つ二畳一間の寒さかな
地下鉄の零時車掌の年賀かな

愛知 大久保志遠

* 泥濘に踵跳ね上げ根木打つ
小切子のしやらんしやらしやら泥濘雪
もう何も求めぬ母に日脚伸ぶ
利休とふ名をもて冬芽ひかり帯ぶ

能村研三選

* 〇番線ホームの先の枯野かな 千葉 稗田 寿明

夕闇をトンボで均す息白し
霜のこゑ三半規管こたへけり
おしくらまんぢゅう押されて泣きな葉牡丹よ
冬木道どちらともなく手をつなぐ
金堂跡歩数ではかる初時雨

棚橋 朗

* 奥飛驒の山苞かこむ葉喰
散紅葉ちり尽き溪の黙ふかむ
年惜しむあれそれこれと忙しきも
闇はらふ月光清し除夜詣
僧堂を懐にして山眠る
的干して弓道場の小春かな

岡本 秀子

* 一些事につまづき暮れて柚子は黄に
省略の限りを吹かれ蓮の骨
黙々と織る毛氈や年の内